―新収品紹介―

円山応挙筆　東山三絶図　　紙本墨画　40.3×81.5㎝

ここにご覧にいれるのは大和文華館が最近購入し、夏季展『日本近世の絵画』ではじめて公開する「東山三絶図」です。この作品は有名な古美術研究雑誌「国華」の936号(昭和46年７月刊)に、東京国立文化財研究所の河野元昭氏によって紹介され、美術史家の間に知られるようになりました。

僧侶で漢詩をよくした六如と書家の永田観鶩と画家の円山応挙とは、たがいに京都の文化人として親しく交際していました。彼等三人は天明６年（1786）８月18日、京都東山の酒楼華洛庵に遊び、酒を飲んで歓談しました。華洛庵は東山の真葛カ原にあり、観鶩の筆になる「東山第一楼」という看板がかかり、京都の知識人のお気に入りの酒楼でした。また、真葛カ原は江戸時代後期に観楽地として栄え、どの店にも京美人の芸妓がいて、弦歌があちこちからきこえてくるという雰囲気でした。

この絵は親友との歓談によってよい気分になった応挙が、少しお酒の入った勢いで一気に書きあげた草体の墨絵です。画面の向って右側に見える大きな酒楼は華洛庵、すなわち東山第一楼です。楼上に三味線を手にした芸妓のほかに三人の人物がいますが、これはおそらく六如、観鶩、応挙でしょう。酒楼は小高いところにあったらしく、京都の町並が眺められます。左方はるかに見えるのは京都のシンボル、東寺（教王護国寺）の五重塔です。画面上部に下記のような賛があります。

繞檻雲山春復秋
帝州収得在毫頭
丹青天下無双手
佳麗東山第一楼
　丙午秋分後三日
　売痴菴六如
　席上漫題
　黎祁菴観鶩書

この賛は六如の作った詩を観鶩が書き写したものです。六如は書が得意でなかったので、自作の詩をよく観鶩に浄書してもらっています。六如の賛は、豊かな移り行きをもった京都の自然をたたえ、それを一望に見渡せるこの酒楼を東山の最もよい楼だと賞し、それらを苦もなく描きこなす応挙の画技を「天下無双手」とほめています。この作品は詩、書、画の各人三人（三絶）の合作としても、比較的類例の少ない応挙の草体の墨絵としても興味深いものがあります。また、江戸時代後期の京都の知識人の交友を物語る貴重な資料とも言えましょう。

季刊 美のたより №24
昭和48年 6月1日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.